

# 空間2次元放物型楕円型 Keller-Segel 方程式に対する 初期値問題の解の有界性

永井 敏隆 (広島大学名誉教授)

## 1 はじめに

未知関数  $u = u(t, x)$ ,  $\psi = \psi(t, x)$  ( $t > 0$ ,  $x \in \mathbb{R}^2$ ) に関する次の初期値問題を考える :

$$(CP)_\psi \begin{cases} \partial_t u = \Delta u - \nabla \cdot (u \nabla \psi), & t > 0, x \in \mathbb{R}^2, \\ -\Delta \psi = u, & t > 0, x \in \mathbb{R}^2, \\ u(0, x) = u_0(x), & x \in \mathbb{R}^2. \end{cases}$$

ただし,  $\psi$  は対数ポテンシャル  $N(x)$  と  $u(t, x)$  との合成積で与えられる.

$$\psi(t, x) := (N * u)(t, x) = \int_{\mathbb{R}^2} N(x - y) u(t, y) dy, \quad N(x) = -\frac{1}{2\pi} \log |x|. \quad (1)$$

初期データは

$$u_0(x) \geq 0 \quad (x \in \mathbb{R}^2), \quad u_0 \not\equiv 0, \quad u_0 \in L^1$$

を満たすとし,  $u \geq 0$  なる  $(CP)_\psi$  の解  $(u, \psi)$  を考える. 以下,

$$L^p = L^p(\mathbb{R}^2), \quad \|\cdot\|_p = \|\cdot\|_{L^p} \quad (1 \leq p \leq \infty)$$

で表す.

初期値問題  $(CP)_\psi$  は, 細胞性粘菌の走化性による集合現象に関する数理モデルとして Keller, Segel [6] により提唱された放物型方程式系をより単純化したものである (Hillen, Painter [4] をも参照). また, 重力運動下における粒子群の運動を表すものでもある (Biler, Nadzieja [1], Wolansky [11]). 走化性モデルの場合  $u$  は粘菌の密度で  $\psi$  は誘因化学物質の濃度を表し, 粒子群運動の場合  $u$  は粒子密度を  $\psi$  は重力ポテンシャルを表す.

$\psi$  に関して,

$$\psi(t) \in L^1_{loc}(\mathbb{R}^2) \iff \int_{\mathbb{R}^2} u(t, x) \log(1 + |x|) dx < \infty \quad (2)$$

---

e-mail: nagai@math.sci.hiroshima-u.ac.jp

室蘭工業大学数理科学談話会 平成 29 年 8 月 30 日

が成立つ。解  $u$  に減衰条件 (2) を課さないで考える場合、 $(CP)_\psi$  の代わりに次の初期値問題

$$(CP) \begin{cases} \partial_t u = \Delta u - \nabla \cdot (u(\nabla N * u)), & t > 0, x \in \mathbb{R}^2, \\ u(0, x) = u_0(x), & x \in \mathbb{R}^2 \end{cases}$$

を考える。ただし、

$$(\nabla N * u)(t, x) = -\frac{1}{2\pi} \int_{\mathbb{R}^2} \frac{x-y}{|x-y|^2} u(t, y) dy.$$

なお、初期値問題 (CP) の非負解  $u$  が減衰条件 (2) を満たせば、 $\psi$  を式 (1) で定めれば  $(u, \psi)$  は初期値問題  $(CP)_\psi$  の解となる。

初期値問題 (CP) ( $(CP)_\psi$ ) の非負解に対して、次が成立つ。

(i) (質量保存)  $\int_{\mathbb{R}^2} u(t, x) dx = \int_{\mathbb{R}^2} u_0(x) dx = m, t > 0.$

(ii) (重心保存)  $\int_{\mathbb{R}^2} xu(t, x) dx = \int_{\mathbb{R}^2} xu_0(x) dx, t > 0.$

(iii) (2次モーメント等式)  $\int_{\mathbb{R}^2} |x|^2 u(t, x) dx = \int_{\mathbb{R}^2} |x|^2 u_0(x) dx + 4m \left(1 - \frac{m}{8\pi}\right) t, t > 0.$

非負初期データ  $u_0$  に対する総質量  $\int_{\mathbb{R}^2} u_0(x) dx$  の値が  $8\pi$  を境として、非負解  $u$  の性質が大きく変わることが知られている：

- 劣臨界  $\int_{\mathbb{R}^2} u_0(x) dx < 8\pi$  の場合、非負解  $u$  は時間大域的に存在し、 $t \rightarrow \infty$  のとき  $\|u(t)\|_\infty \rightarrow 0$  で自己相似解に漸近する。
- 優臨界  $\int_{\mathbb{R}^2} u_0(x) dx > 8\pi$  の場合、非負解  $u$  は有限時間で爆発する可能性がある。すなわち、 $u$  の最大存在時間  $T_m$  が有限で、

$$\limsup_{t \rightarrow T_m} \|u(t)\|_\infty = +\infty.$$

実際、 $\int_{\mathbb{R}^2} |x|^2 u_0(x) dx < \infty$  ならば、2次モーメント等式より  $T_m < \infty$  となる。

この講演で、臨界  $\int_{\mathbb{R}^2} u_0(x) dx = 8\pi$  の場合に、まず非有界な非負時間大域解に関する既存の結果を紹介し、その後非負解の有界性に関する結果について解説する。なお、臨界の場合、非負初期データ  $u_0 \in L^1$  に対する条件  $\int_{\mathbb{R}^2} u_0(x) \log(1 + |x|) dx < \infty$  の下で、初期値問題 (CP) ( $(CP)_\psi$ ) の非負解の時間大域的存在が Nagai, Ogawa [8] により得られている。

## 2 臨界質量を持つ非有界な非負時間大域解

まず、Blanchet, Carrillo, Masmoudi [3] による次の結果を紹介する：

- (Blanchet, Carrillo, Masmoudi) 次の仮定

$$u_0 \geq 0, \quad u_0 \log u_0, \quad u_0 |x|^2 \in L^1, \quad \int_{\mathbb{R}^2} u_0 dx = 8\pi$$

の下で、

(i) 初期値問題 (CP)  $((\text{CP})_\psi)$  の非負解  $u$  は時間大域的に存在し,

(ii)  $\lim_{t \rightarrow \infty} u(t, x) = 8\pi\delta_{x_0}(x)$  in the sense of measures.

ただし,  $\delta_{x_0}(x)$  は点  $x_0$  での Dirac のデルタ関数,  $x_0$  は  $u_0$  の重心, すなわち,

$$x_0 = \frac{1}{8\pi} \int_{\mathbb{R}^2} x u_0(x) dx.$$

臨界  $\int_{\mathbb{R}^2} u_0(x) dx = 8\pi$  の場合, 2次モーメント等式より 2次モーメント保存

$$\int_{\mathbb{R}^2} |x|^2 u(t, x) dx = \int_{\mathbb{R}^2} |x|^2 u_0(x) dx, \quad t > 0$$

が成り立ち, Blanchet, Carrillo, Masmoudi の結果の証明で 2次モーメント保存は本質的役割を果たしている. なお, 仮定の中の  $u_0 \log u_0 \in L^1$  は取り除くことができる.

Blanchet, Carrillo, Masmoudi の結果は, 初期データ  $u_0$  の空間遠方での減衰がかなり速ければ,  $\lim_{t \rightarrow \infty} \|u(t)\|_\infty = \infty$  となることを示している. 一方,  $\int_{\mathbb{R}^2} |x|^2 u_0(x) dx = \infty$  の場合でも非負解は非有界になりえることを Naito, Senba [10] は示した.

- (Naito, Senba) 次の条件

$$\int_{\mathbb{R}^2} u_0 dx = 8\pi, \quad \int_{\mathbb{R}^2} |x|^2 u_0(x) dx = \infty$$

を満たす球対称な非負初期データ  $u_0$  で

$$\limsup_{t \rightarrow \infty} \|u(t)\|_{L^\infty} = \infty, \quad 0 < \liminf_{t \rightarrow \infty} \|u(t)\|_{L^\infty} < \infty$$

と成るものが存在する. なお,  $u(t, x)$  は  $x$  に関して球対称である.

### 3 非負解の有界性に関する既存結果：臨界質量の場合

臨界質量の場合, 初期値問題 (CP) は次の定常解を持つ:  $b > 0, x_0 \in \mathbb{R}^2$  に対し,

$$\theta_{b, x_0}(x) = \frac{8b}{(|x - x_0|^2 + b)^2} \quad (x \in \mathbb{R}^2).$$

定常解  $\theta_{b, x_0}$  は次を満たす:

$$(i) \theta_{b, x_0} \in L^1 \cap L^\infty, \quad \int_{\mathbb{R}^2} \theta_{b, x_0} dx = 8\pi,$$

$$(ii) \int_{\mathbb{R}^2} |x|^p \theta_{b, x_0}(x) dx < \infty \quad (0 < \forall p < 2), \quad \int_{\mathbb{R}^2} |x|^2 \theta_{b, x_0}(x) dx = \infty.$$

以下,  $x_0$  が原点のとき  $\theta_{b, 0}$  を  $\theta_b$  で表す. すなわち,

$$\theta_b(x) = \frac{8b}{(|x|^2 + b)^2}.$$

Blanchet, Carlen, Carrillo [2] による次の結果を述べる.

- (Blanchet, Carlen, Carrillo) 次の条件

$$(i) \quad u_0 \geq 0, \quad u_0 \in L^1, \quad \int_{\mathbb{R}^2} u_0 dx = 8\pi,$$

$$(ii) \quad \int_{\mathbb{R}^2} u_0 \log u_0 dx + \frac{1}{4\pi} \iint_{\mathbb{R}^2 \times \mathbb{R}^2} u_0(x)u_0(y) \log |x - y| dx dy < \infty,$$

$$(iii) \quad \exists b > 0, \quad \mathcal{H}_b[u_0] := \int_{\mathbb{R}^2} (\sqrt{u_0} - \sqrt{\theta_b})^2 \frac{1}{\sqrt{\theta_b}} dx < \infty$$

の下で, 任意の  $\tau > 0$  に対し,

$$\sup_{t \geq \tau} \|u(t)\|_p < \infty \quad (1 \leq \forall p < \infty)$$

が成り立ち, さらに

$$\lim_{t \rightarrow \infty} \|u(t) - \theta_{b, x_0}\|_p = 0 \quad (1 \leq \forall p < \infty).$$

ただし,  $x_0$  は  $u_0$  の重心.

上の条件 (ii) の積分は  $u_0$  の自由エネルギーで, 条件 (iii) の汎関数  $\mathcal{H}_b$  は Blanchet, Carlen, Carrillo [2] で導入されたもので

$$\mathcal{H}_b[u(t)] \leq \mathcal{H}_b[u_0] \quad (t > 0), \quad \mathcal{H}_a[u_0] = \infty \quad (\forall a \neq b)$$

を満たす. 非負解の有界性を得るのに, Wasserstein 空間でのエントロピーの勾配流は熱流であることを示した Jordan, Kinderlehrer, Otto [5] によるスキームを用いている.

次に, López-Gómez, Nagai, Yamada [7] による結果を述べる.

**定理 1.**  $u_0 \in L^1 \cap L^\infty$ ,  $\int_{\mathbb{R}^2} u_0 dx = 8\pi$  を満たす非負初期データ  $u_0$  が

$$\liminf_{R \rightarrow \infty} \left( R^2 \int_{|x| \geq R} u_0^\# dx \right) > 0 \tag{A1}$$

を満たすならば, ある  $b > 0$  が存在して

$$\|u(t)\|_p \leq \|\theta_b\|_p \quad (\forall t \geq 0, 1 \leq \forall p \leq \infty)$$

が成り立つ. ただし,  $u_0^\#$  は  $u_0$  の symmetric rearrangement (Schwarz symmetrization).

この定理を証明するのに, rearrangement に関する技法と比較原理を用いている.

条件 (A1) に関して, 定常解  $\theta_{b, x_0}$  について  $\theta_{b, x_0}^\# = \theta_b$  なので,

$$\lim_{R \rightarrow \infty} \left( R^2 \int_{|x| \geq R} \theta_{b, x_0}^\# dx \right) = 8b\pi$$

である. 2次モーメントについては,

$$\text{条件 (A1)} \implies \int_{\mathbb{R}^2} |x|^2 u_0(x) dx = \infty$$

が成り立つ. また, Blanchet, Carlen, Carrillo の条件 (iii) との関係は

$$\mathcal{H}_b[u_0] < \infty \implies \text{条件 (A1)}.$$

## 4 主結果

この節で, Nagai, Yamada [9] で得られた結果について述べる. まず, 定理 1 での条件 (A1) をより使いやすくした比較判定法について述べる.

**定理 2** (比較判定法). 非負初期データ  $u_0 \in L^1 \cap L^\infty$  に対し, ある非負関数  $f \in L^1$  が存在して

$$u_0(x) \geq f(x) \quad (|x| \gg 1), \quad \liminf_{R \rightarrow \infty} \left( R^2 \int_{|x| \geq R} f^\# dx \right) > 0$$

ならば,  $u_0$  は条件 (A1) を満たす. したがって, さらに  $\int_{\mathbb{R}^2} u_0 dx = 8\pi$  を満たすならば,  $\sup_{t>0} \|u(t)\|_\infty < \infty$  が成り立つ.

この定理より次の系が得られる.

**系 3.**  $u_0 \in L^1 \cap L^\infty$ ,  $\int_{\mathbb{R}^2} u_0 dx = 8\pi$  を満たす非負初期データ  $u_0$  に対し, ある正定数  $C$  が存在して

$$u_0(x) \geq C|x|^{-4} \quad (|x| \gg 1) \quad (3)$$

ならば,  $\sup_{t>0} \|u(t)\|_\infty < \infty$  が成り立つ.

系 3 の条件 (3) は, 空間遠方で  $u_0$  はある定常解より上にあることを意味する. 実際, 条件 (3) より  $b > 0$  を  $C = 8b$  と定めれば,

$$u_0(x) \geq \frac{8b}{(|x|^2 + b)^2} = \theta_b(x) \quad (|x| \gg 1)$$

である. したがって, 比較判定法 (定理 2) より  $u_0$  は条件 (A1) を満たす.

**注 1.** 系 3 の条件 (3) を, ある  $4 < p < \infty$  に対し

$$u_0(x) \leq C|x|^{-p} \quad (|x| \gg 1)$$

に置き換えると,  $\int_{\mathbb{R}^2} |x|^2 u_0(x) dx < \infty$  なので, 2 節で述べた Blanchet, Carrillo, Masmoudi [3] の結果より,  $\lim_{t \rightarrow \infty} \|u(t)\|_\infty = \infty$  となる.

次に, 条件 (A1) を条件 (A2)

$$\liminf_{R \rightarrow \infty} \left( R^2 \int_{|x| \geq R} u_0 dx \right) > 0 \quad (A2)$$

に置き換えて非負解の有界性が得られないかを調べる. 条件 (A1) ならば条件 (A2) が成り立つが, 一般に逆は成り立たない. しかしながら, 初期値  $u_0$  が球対称ならば, 条件 (A2) の下で非負な球対称解の有界性が得られる.

**定理 4.**  $u_0 \in L^1 \cap L^\infty$ ,  $\int_{\mathbb{R}^2} u_0 dx = 8\pi$  を満たす球対称な非負初期データ  $u_0$  が条件 (A2) を満たすならば,  $\sup_{t>0} \|u(t)\|_{L^\infty} < \infty$  が成り立つ.

例 1.  $\mathbb{R}^2$  上の非負関数  $f$  を

$$f(x) = \chi_A(x)|x|^{-4}, \quad A = \bigcup_{k=1}^{\infty} \{x \in \mathbb{R}^2; 2k-1 \leq |x| \leq 2k\}$$

で定める. ただし,  $\chi_A$  は  $A$  の特性関数. このとき,

$$\liminf_{R \rightarrow \infty} \left( R^2 \int_{|x| \geq R} f dx \right) \geq \frac{1}{3} \lim_{R \rightarrow \infty} \left( R^2 \int_{|x| \geq R} |x|^{-4} dx \right) > 0.$$

球対称な非負初期データ  $u_0$  を

$$u_0(x) = \frac{8\pi}{\|f\|_1} f(x) \quad (x \in \mathbb{R}^2)$$

で定めると,  $\int_{\mathbb{R}^2} u_0 dx = 8\pi$  である.  $u_0$  は系 3 の条件 (3) を満たさないが条件 (A2) を満たす. したがって,  $\sup_{t>0} \|u(t)\|_{\infty} < \infty$  となる.

また,  $u_0$  は 3 節の Blanchet, Carlen, Carrillo の条件 (iii) を満たさない:

$$\mathcal{H}_b[u_0] = \int_{\mathbb{R}^2} (\sqrt{u_0} - \sqrt{\theta_b})^2 \theta_b^{-1/2} dx = \infty, \quad \forall b > 0.$$

最後に, 条件 (A1) と (A2) に関連することとして, 次の命題

- $\mathbb{R}^2$  上の非負関数  $f \in L^1$  に対し,

$$\liminf_{R \rightarrow \infty} \left( R^2 \int_{|x| \geq R} f dx \right) > 0 \implies \liminf_{R \rightarrow \infty} \left( R^2 \int_{|x| \geq R} f^{\sharp} dx \right) > 0 \quad (4)$$

を考える. 上の命題は一般に成り立たない ([9, Example 5.2]). 逆が成り立つことは, 次の不等式

$$\int_{|x| \geq R} f^{\sharp} dx \leq \int_{|x| \geq R} f dx$$

より明らかである. 上の (4) が成り立つための  $f$  に対する条件を次の定理で述べる. 以下, 可測集合  $A \subset \mathbb{R}^2$  のルベグ測度を  $|A|$  で表す.

定理 5.  $\mathbb{R}^2$  上の非負関数  $f \in L^1$  は

- (i)  $f(x) \rightarrow 0$  ( $|x| \rightarrow \infty$ ),
- (ii)  $\mu(t) := |\{x; f(x) > t\}| \rightarrow \infty$  ( $t \rightarrow +0$ ),
- (iii)  $r(t) := \sup\{|x|; f(x) \geq t\}$  ( $t > 0$ ) に対し,  $\liminf_{t \rightarrow +0} \frac{\mu(t)}{r(t)^2} > 0$

を満たすとする. このとき,

$$\liminf_{R \rightarrow \infty} \left( R^2 \int_{|x| \geq R} f dx \right) > 0 \implies \liminf_{R \rightarrow \infty} \left( R^2 \int_{|x| \geq R} f^{\sharp} dx \right) > 0.$$

## 参考文献

- [1] P. Biler and T. Nadzieja, Existence and nonexistence of solutions for a model of gravitational interaction of particles, I, *Colloq. Math.* **66** (1994), 319–334.
- [2] A. Blanchet, E. Carlen and J. A. Carrillo, Functional inequalities, thick tails and asymptotics for the critical mass Patlak-Keller-Segel model, *J. Funct. Anal.* **262** (2012), 2142–2230.
- [3] A. Blanchet, J. A. Carrillo and N. Masmoudi, Infinite time aggregation for the critical Patlak-Keller-Segel model in  $\mathbb{R}^2$ , *Comm. Pure Appl. Math.* **61** (2008), 1449–1481.
- [4] T. Hillen and K. J. Painter, A user’s guide to PDE models for chemotaxis, *J. Math. Biol.* **58** (2008), 183–217.
- [5] R. Jordan, D. Kinderlehrer and F. Otto, The variational formulation of the Fokker-Planck equation, *SIAM J. Math. Anal.* **29** (1998), 399–415.
- [6] E. F. Keller and L. A. Segel, Initiation of slime mold aggregation viewed as an instability, *J. Theor. Biol.* **26** (1970), 399–415.
- [7] J. López-Gómez, T. Nagai and T. Yamada, The basin of attraction of the steady-states for a chemotaxis model in  $\mathbb{R}^2$  with critical mass, *Arch. Ration. Mech. Anal.* **207** (2013), 159–184.
- [8] T. Nagai and T. Ogawa, Global existence of solutions to a parabolic-elliptic system of drift-diffusion type in  $\mathbb{R}^2$ , *Funkcial. Ekvac.* **59** (2016), 67–112.
- [9] T. Nagai and T. Yamada, Boundedness of solutions to a parabolic-elliptic Keller-Segel equation in  $\mathbb{R}^2$  with critical mass, to appear in *Adv. Nonlinear Stud.* Published online 06/21/2017.
- [10] T. Senba, Bounded and unbounded oscillating solutions to a parabolic-elliptic system in two dimensional space, *Commun. Pure Appl. Anal.* **12** (2013), 1861–1880.
- [11] G. Wolansky, On steady distributions of self-attracting clusters under friction and fluctuations, *Arch. Rational Mech. Anal.* **119** (1992), 355–391.